

2

小説 ぽーち
イラスト saraki

えっ 転移 失敗!?

成功?

試し読み版



CONTENTS
目次

■第2章

プロローグ

- 1 異世界サバイバル
 - 2 姫騎士を保護
 - 3 姫騎士の告白
 - 4 姫騎士の純潔
 - 5 新しいお知らせ
 - 6 再び異世界へ
 - 7 領主と対面
 - 8 冒険者ギルド
 - 9 英雄の卵
 - 10 ふたりの拠点
 - 11 異世界生活の始まり
- エピローグ

5
16
25
44
57
74
86
103
120
133
149
161
166

■第3章

プロローグ

- 1 実里との再会
 - 2 本宮花梨
 - 3 みんなで異世界へ
 - 4 魔術士ギルド
 - 5 みんなで一緒に……
- エピローグ

167
179
211
242
264
298
344
345



What? Failure to transition?
.....success?

第2章

プロローグ

センソリヴェル王国は大陸南部に勢力を持つ多民族国家である。

ヒューマン、エルフ、ドワーフ、ハープリング、獣人、魔族等々……それらすべての種族を、人、人間、人類と呼び、名目上はすべての種族が対等に生きていける国といわれている。

無論、種族間の差別が皆無というわけではなく、人口の多いヒューマンの発言力が大きくはあるものの、大陸内でセンソリヴェル王国よりも種族間差別の少ない国はない。

またセンソリヴェル王国は冒険者の国ともいわれている。人の住みにくい荒野を開拓して興おこった国であり、建国以降も魔物を駆逐し人類圏を広げてきた歴史がある。大陸全土に支部を持つ冒険者ギルド本部を有し、そして優秀な冒険者を数多く抱えている。

そのセンソリヴェル王国の南西部には、死の荒野と呼ば

れる岩石砂漠が広がっている。

そこには強力な魔物がはびこっており、開拓不可能といわれていた不毛の荒野は、かつてそのまま世界の果てにながっている信じられていた。

しかし150年ほど前のこと。

冒険者ジャナ・ケラーノ率いる一団が、その荒野のはるか南西先に広い森林を発見した。

豊かな森林資源と肥沃な土、そして森にひしめくように活動する凶悪な魔物たち。

その森は『ジャナの森』と名づけられ、発見以降は冒険者が数多く訪れるようになった。

やがて人の往来が道となり、野営が集落へ、村へ、そして町へと発展していく。

ジャナの森発見から50年ほどでそこには立派な町ができた。

センソリヴェル王国はマイルグラードと呼ばれるようになったその町に、冒険者たちをまとめるための貴族を派遣した。

その貴族、デズモンド・サリス男爵は、現地で活動する冒険者たちと苦楽をともにし、マイルグラードの発展に大

大きく貢献した。

その功績を買われたデズモンドは辺境伯に叙任されることとなり、マイルグランドを中心としたジャナの森周辺はサリス辺境伯領となった。

ジャナの森は広い。

マイルグランドができて100年が経とうとしているが、人々が把握しているのはジャナの森全体の1%にも満たないといわれている。

ゆえに、いくらでもビジネスチャンスは転がっているのだった。

危険を顧みなければ、であるが。

ジャナの森ではいまでも毎年のように新種の動植物が発見されており、それは新たな資源として市場に流れ込んでいる。

多くの冒険者や商人が、手つかずの場所を探索しては調査と開拓を繰り返し返していた。

今日もまた、ジャナの森をひとつの団体が調査していた。そこはまだ未開の地域だが、Cランク級の強い魔物が出

現することだけは確認されている。

一団を率いるのは白銀の鎧に身を包んだ見目麗しい女性だった。

森林の穏やかな風に、無造作に束ねた銀色の長い髪をそよがせながら、森の中の道なき道をゆく。

胸元が大きく開いたグレーの華麗なワンピースの上に、首から肩周りを覆う肩当て、胸から腹部を守る胸甲、腰周りを守る腰当て、足元には金属製のミドルブーツを履き、脚の半ばまでが厚手のタイツに覆われている。ワンピースのスカート部分の前が大きく開いているせいで太ももが少し露出していた。

兜は着けておらず、頭には黄金のティアラを乗せており、一見すれば動きやすさはともかく防御力という点では少し不安の残る装備のように見える。

しかし彼女が着ている衣服はすべて希少な魔物の素材で作られたものであり、薄い布や革であったとしても、並の金属装甲に勝る防御力を誇るものだった。

また、身体の一部を覆う鎧には特殊な魔術が施されており、実際に覆われていない部分もその魔術効果によって守られているのである。

無防備に見える頭部や、豊満な胸の谷間が露出している胸元に攻撃を受けたとしても、その魔術効果によつてはじき返してしまうのだ。

それ以外にも重さ軽減の効果により金属装甲部分は革の鎧より軽く、環境管理の効果により湿度や温度が最適に保たれ、蒸れるということがない。

さらに、わずかながら疲労や怪我の回復効果もあるのだつた。

無論、なんの対価もなしにこれだけ高い効果を持つ防具を使う、というわけにはいかない。

まず第一に、希少な素材を使い豊富な魔術効果を施した衣服や装備は非常に高価であり、並の人物では手に入れることができない。

そして多様かつ効果の高い魔術効果を發揮するための魔力は、装備者本人が融通しなくてはならず、普通の人間では1時間と経たずに魔力が枯渇してしまうだろう。

そのような鎧を身に着け、平然と行動しているその女性が大それた者でないということは、見る人が見れば容易に想像できるのであった。

つき従うのは10人の屈強な男たち。

うち8人は革鎧などの粗末な装備を身に着けているが、残りふたりはそこそ立派な身なりだった。

ひとりりは金属製の軽鎧、もうひとりりは仕立てのよさそうなローブを身に着けている。

先頭を白銀鎧の女性が歩き、そのすぐうしろをローブの男性と革鎧のひとりが並んで歩いている。

そのうしろには革鎧の男たちが周りを警戒しながら密集しており、軽鎧の男が最後尾を務めていた。

先頭を歩く女性は気づいていないが、あとに続く男たちの動きには、一部不穏なものが含まれていた。

全員が全員なにかを企んでいるわけではないようで、その不穏な動きを先頭の女性に伝えるべきかどうか迷っている者もいたのだが、最後尾を歩く軽鎧の男が放つ威圧感のようなものが気になって自由に動けないという状況だった。

そんな中、白銀鎧の女性のすぐうしろを歩いていた革鎧の男が、懐ふところから1本の巻物を取り出した。

広げると分厚い1枚の紙になり、その表面には幾何学模様ようが描かれている。

その動作に気づいた様子もなく歩く白銀鎧の女性に、幾何学模様の紙を持った革鎧の男は、少しペースを上げ近づく。

巻物を持った男がうしろを歩くローブの男性へ振り向く。彼はその視線を受けて頷いた。

革鎧の男が手に持った紙を女性の背中に当てる。

「ん……？」

鎧越しとはいえ触られたことに気づいた女性が振り返ろうとしたところ、背中に当てられた紙の模様が鋭い光を放った。

その直後、女性はその場に力なく倒れた。

「貴様、なにを……!!」

倒れたとはいえ、女性の意識ははっきりしているようで、なんとか首をひねって振り返る。自分の背中に触れたであろう男もその場に倒れていた。

男はすでに息をしていなかった。

それ以外にも革鎧の男が4人、合計で5人が倒れている。

ローブの男と軽鎧の男は立っており、残った革鎧のうち、ひとりとは平然と立っていたが、残りふたりは事態を飲み込めていないようで、倒れた仲間や立っている男たちのあい

だでオロオロとしていた。

「5人か……やはり多めに連れてきて正解だったな」

「ああ。ま、とりあえずおまえらは死んどけ」

軽鎧の男の言葉を受け、ひとり落ち着いていた革鎧の男が、残りふたりの革鎧の男の首を短剣で切り裂いた。

「貴様ら、さっきからなにをしている？ 私になにをした?!」

「これですよ」

ローブの男が少しだるそうにしゃがみ、落ちていた紙を拾う。

先ほど女性の背中に当てられて光を放った、幾何学模様が描かれた紙だった。

「まさか……スクロール!? そんなものをどこで!」

「あなたは知らなくていいですよ」

ローブの男が持っていた紙は、手に取ったあとすぐにポロポロと崩れるように消滅した。

「貴様らっ!! こんなことをして……コルボーン伯爵の名に泥を塗る気か!!」

「そのコルボーン伯爵の命令でね」

「なっ……!!」

革鎧の男が短剣についた血を払いながら、答えた。

そしてその男はそのまま女性に歩み寄っていく。

「どれどれ……」

革鎧の男は女性の傍らかたわらにしゃがみ込むと、うつぶせに倒れて首だけを起こしていた彼女の身体へ手を伸ばす。ゆっくりと近づけた手が女性の脚のつけ根あたりに触れた。

「くっ……触るな、不埒者がっ……」

「とりあえず触るのは問題ない、と」

女性の言葉を無視しつつ、革鎧の男はもう一方の手を女性の肩に回す。

「よっこらせつと」

「うぐ……」

そしてそのまま仰向けにひっくり返すと、手足に力が入らないのか彼女はひっくり返された勢いのまま腕や脚をだらんと開いた。

ワンピースのスカート部分は前が少し露出するデザインのため、タイトの上の太ももが露わになり、その奥のショーツまで見える状態である。

「うひょー、たまんねえなあ……」

革鎧の男は、小さく歓声を上げながら、露出された内股

をペシペシと少し強めに叩く。

「なっ……？」

女性が驚きの声を上げたのは、なにも男の下卑た行為のせいではない。

「しかしスクロールつてのはすげーな。あの姫騎士がこの有り様だぜ？」

「5人の命を消費したかな」

革鎧の男に軽鎧の男が答えたが、革鎧の男は軽く首を振る。

「5人で済んだんなら安いもんだよ」

革鎧の男が姫騎士と呼ばれた女性に下卑た視線を落とす。

「……私をどうするつもりだ？」

「コルボーン伯爵は活きのいい綺麗な肉奴隷をお望みですね」

「なっ……」

「しかも調教済みがいらいらしんだわ。つてことで、いいんだよな、最初は俺で？」

革鎧の男がふたりに確認の視線を送る。

「スクロールに流す魔力の調整が思いのほか疲れましたからね。私は少し休ませてもらうから、それまでになじませ

ておいてくださいよ」

そう言ってローブの男はどっかと地面に腰を下ろした。

「姫騎士は純潔との噂だが、俺は処女は好かん」

軽鎧の男は無表情のままそう答えた。

「つてことで、アンタの初めては俺がいただくぜ」

「おのれえ……」

姫騎士は怒りに燃えた目で革鎧の男を睨みつけたが、しかし手足が動かないためどうすることもできなかった。

そして身体の動きとともに魔術効果も封じられてしまったらしく、本来であれば害意のある行為を弾き飛ばす鎧も意味をなさず、胸甲や腰^{グセツト}当てはあつさり^トと外されてしまった。

革鎧の男は胸甲の下から現われたワンピースの留め具をナイフで切ると、はらりと前をはだける。

大きく開いたワンピースの胸元からわずかに見えていたフリルつきの黒いインナーと、それに包まれた見事な乳房やキュッと締まったウェストが現われた。

コルセット代わりになっていたワンピースから解放されたあとも、そのウェストは一切たるんだ様子を見せない。下から押し上げられていた豊満な乳房が戒めから解放され

てたゆんと揺れた。

「邪魔な布だな、おい」

革鎧の男は裾にナイフを引っかけ、すーっと刃をすべらせて中央からインナーを切り裂いた。

「ご開帳ー……うひょー」

切り裂かれたインナーを開くと、その下から真っ白な乳房が顔を見せた。

緊張のためか、ピンク色の乳首がピンと立っている。

男は露わになったその乳房を、トントンと軽く叩いてみた。

「くっ……」

「へへ、柔らげえなあ」

姫騎士の顔が不快に歪む。

男は軽く触れる程度に叩いただけだが、その胸はブルブルと揺れながら適度な弾力を返してくるのだ。

ただ、これを本格的に揉みしだくのはあとのお楽しみとすることにして、男は股間に手を伸ばした。

腰紐をほどけばすぐに脱がせられる、いわゆる紐パンのようなショーツに手をかけた男だったが、結局これも腰紐部分をスッスツとナイフで切ってしまった。



そしてウエスト部分に指をかけ、ゆつくりとめくる。

「おお……」

めくられた布の下からまず現われたのは、柔らかそうな銀色の薄い恥毛だった。

髪の毛と同じ色で少しだけ縮れているものの、恥毛にしては柔らかかそうであった。

そしてその恥毛の陰から、姫騎士の秘部が顔を出した。

割れ目のあたりは毛がほとんど生えていないため、少し視点をずらせば秘部をくつきりと見ることができた。

そして布が完全に取り払われると同時に、あたりに汗と女の匂いが漂うのだった。

「たまんねえな、おい」

そばにいた革鎧の男にとどまらず、しんどそうに腰を下ろしていたローブの男や、周辺を警戒していた軽鎧の男も思わず身を乗り出して見入っていた。

そこは、ただでさえ白い姫騎士の肌よりもさらに白く、割れ目はびったりと閉じられていたが、内側にはわずかにピンク色が差していた。

「くっ……殺してやる……!」

隠された部分を露出されたことに対しては特に恥じらい

を見せず、姫騎士はただ怒りと憎悪を込めた目を男に向けてた。

「さてさて、その態度がいつまでもちますかねえ」

そう言いながら、男は懐から陶器の小瓶を取り出してふたを開け、中身を手の上に落とした。

小瓶の口からねっとり和白濁した液体がこぼれ落ち、男の手のひらに溜まる。

男はそれを、姫騎士の股に塗りたくった。

「つく……、なにを……」

「ああ、これ？ 媚薬だよ。インキュバスの精液を錬成して作った超強力なやつね」

媚薬を塗られた姫騎士の割れ目が、ヒクヒクと震え始める。

ピッタリと閉じていた割れ目が少し開き、ピンク色の粘膜がわずかに姿を見せた。

「おお、いい感じじゃーん」

男は媚薬のついた指をわずかに開いた割れ目から浅く進入させ、^{ヌル}全体をなぞるように塗りつけていく。

「ん……ぐう……」

「お、すごいな。これま×こについた瞬間イクやつもいる

くらい強力なのに、声も出さねーとは」

姫騎士は怒りの視線を男に向けつつも、下唇を噛み締め
て必死にこらえているようだった。

口を開けばそれは喘ぎ声あえになってしまいで、声を出
さないというよりは出せないといったほうがいだろうか。

しかし身体の反応はどうにもならず、男が指を動かすた
びに姫騎士の腰がビクビクと震える。

手足の感覚はまったくない状態なのに、体幹部分の感覚
はしっかり残っていた。

せめて体幹だけでも動かせるなら頭突きの一発でも食ら
わせてやりたいところだが、感覚だけはあるものの思うよ
うに動かせない。

そして意識はつきりしているにもかかわらず、魔術が
まったく使えない。

先ほどのスクロールの効果により姫騎士はそのような状
態に陥っていたのだった。

「へへ、身体のほうは正直みたいだなあ」

秘部はすでにぱっくりと開き、ヒクヒクと動く腔口から
は愛液がとめどなくあふれていた。

姫騎士のその卑猥な姿に、ローブの男も軽鎧の男も先ほ

どからずつと魅入られてしまっている。

「さて、そろそろいいだろ」

そう言うと革鎧の男は自身のベルトを外し、ズボンとパ
ンツをおろしてイチモツを露出した。

それはすでにいきり勃つており、先端からは透明の液体
が漏れ出ていた。

「どうだい、俺みたいなものに犯される気分つてのは？」

「せいぜい楽しいむがいい。おまえらはいつか必ず殺してや
る」

冷たく淡々と放たれた姫騎士の言葉に、3人の男たちは
背筋が寒くなるのを感じた。

「へ、へへ……。強がりもそこまでいけば立派だな。でも
な、おまえはこれから調教されて肉奴隷になるんだぜ？
まともに身体も動かせないような、ただ男に奉仕するだけ
の存在になるんだ。そんな奴がどうやって俺たちを殺すつ
てだ？」

「ふん。生きていればどうとでも……いや、死んでもグー
ルになって殺しにいつてやる。肉体が減んでもレイスにな
つて殺す。そのときおまえたちがいないのなら、おまえた
ちの親類縁者子々孫々に至るまで必ず殺し尽くす」

姫騎士は凄むでも脅すでもなく淡々と語る。

媚薬の効果で息は荒く、本来なら口を開けば嬌声しか出ないような状態であるにもかかわらず。

水が高いところから低いところに流れるように、天に昇った太陽はいずれ沈んで必ず夜が訪れるように、それは將來必ず起こる事実として男たちの意識に滑り込んでくるのだった。

「私に経験はないが、ソレ、そんな状態で挿入^{はい}するのか？」

「なに……？」

革鎧の男が自分の股間に視線を落とすと、先ほどまでいきり勃っていたのが嘘のような、しなびたイチモツがあった。

「くそっ……！」

男は多少乱暴に陰茎をこすってみたが、ソレはただただしなびたままだった。

「へ、へへ……、俺あよ。今日という日を楽しみにしてたんだよ。あの姫騎士とヤレるなんてよお」

そう言いながら、男は懐から透明な液体の入った小瓶を取り出した。

「こいつあな、サキユバスの愛液を錬成して作った男用の

媚薬だ。本当は何発もやったあとの復活用に持ってきたんだけどな。へへ……」

男は透明な粘液を手に垂らすと、それを自身の陰茎に塗りたくった。

「おとおおっ！ キたぜきたぜ……!!」

しなびていた陰茎に血が流れ込み、硬くなった男のソレは先ほどよりもひと回り大きくなったように見える。

「うっ……おう……、へへ、やべえな、これ」

ときおり男がピクンと腰を引くように震えると、先端から白濁した液体が漏れ出てきた。

どうやら媚薬の効果でわずかながら絶頂に達しているようである。

「へへ……かまやしねえか。これなら何発出しても硬いままだからよお」

男は媚薬の小瓶に栓をすると、ローブの男に投げて寄せた。

「とりあえず姫騎士ん中で1発出したら交代してやるからおまえらも準備しとけ」

「え、いや……」「む……」

だがローブの男と軽鎧の男は、先ほど姫騎士が発した言

葉が耳に残っており、どうしてもその媚薬を使う気になれなかった。

そんなふたりの仲間の様子に気づかず、革鎧の男は姫騎士の脚を広げ、地面に膝をついた。

「じゃ、いきますか」

「ふん……」

姫騎士が冷たい視線を送る中、革鎧の男はゆっくりと腰を近づけていく。

そして亀頭の先端があと少しで姫騎士の秘部に触れようかという、ちょうどそのときだった。

「あー、すいませーん」

随分ずいぶんと間の抜けた、そして場違いな男の声が森に響くのだった。

1 異世界サバイバル

陽一はジャナの森を迷いなく歩いていった。

そこは某樹海のごとく、数メートル歩いて振り返ればもう見覚えのない景色となるほど鬱蒼と茂った森だった。

訓練であれば適当に歩いて魔物を倒したあと、遭難しようとも【帰還十】で帰ればいいのだが、今回は明確な目的地がある。

ホームポイントから東に向かったところにある、おそらくは町であろう場所。

下手に歩けば明後日の方向へと進んでしまう可能性もある。

いざとなれば【帰還十】でいつでも帰れるが、遭難するたびに帰っていたのではいつまでたつても目的地には着けず、異世界冒険を始めることができないのである。

しかしそれでも陽一は歩く。

まるで正しい道筋を知っているかのよう。

いや、知っているのだ。

【鑑定十】。

使えば使うほどにその機能の豊富さに驚かされる。使い続けてわかったのは、ウェブ検索エンジンにできそうなことは大抵できるということだ。

知りたい情報を検索すれば答えが出るのはもちろん、画像、動画、そして地図検索も可能だった。

その情報源は『知識の宝庫』であり、管理者の神通力を使ってどのような場所からでも情報閲覧ができる。

陽一は知らないが——そしてスキルを与えたあの管理者も把握してないことだが——この【鑑定十】もじつは成長しているのだった。

管理者があとつけで与えた加護が、陽一の使いやすいうにカスタマイズを繰り返しており、こうなればいいなあ、となんとなく望めば、それに応えるかたちで変化しているのだった。

その結果【鑑定十】は『森羅万象ブラウザ』とでもいべき能力へと成長していた。

陽一は【鑑定十】の地図検索機能からナビを使って最短かつ歩きやすいルートを検索し、迷いなく歩いた。

そのあいだも遭遇する魔物たちは狩っていたが、あくまで町を目指すのが主目的なので、拳銃の射程範囲外にいる

魔物は無視している。

食糧については1カ月は優に生きていけるだけのものを用意していた。

【無限収納十】の時間停止機能を活用し、できたての弁当や飲食店のテイクアウト品を大量に収納しているので、食事に困ることはない。

しかし、これはあくまで非常食と考えている。

せっかく異世界に来たのだから、サバイバルなことをしてみたい、と陽一は思っていた。

狩った魔物は【無限収納十】で楽に解体可能だし、魔物の肉だけでなく、森に自生する植物や木の实、果実やキノコ類も採取可能である。

食べられるかどうか、美味いかどうかは【鑑定十】で調べればいい。

半日ほど歩いたところで食事を摂ることにした。

さすがに火をおこすのは面倒なので、カセットコンロを取り出した。

ガスボンベも大量に収納済みだ。

それどころか、本格的なガスコンロとLPガスボンベまで用意しているのだが、最初からそれを出すと、なんとな

く雰囲気壊れそうなので今回は自重することにした。

まな板と包丁を出し、魔物の肉を適当に切る。

魔物の肉は保有魔力の関係から高ランクになるほど美味くなる傾向があるらしいので、ワンアイドベアーの肉を使った。

採取したキノコと山菜を適当に切つてザルに入れ、コックつきの水タンクを使って水洗いする。

もちろん水も豊富に持参している。

あとはフライパンで焼きながら適当に味つけすればおかずは完成だ。

米は業務用の5升炊き炊飯器を購入し、事前に炊いておいたものを炊飯器ごと収納してある。

それを丼に2合ほどよそい、少しでも米が冷めないうちに炊飯器は手早く【無限収納十】へ。

入れ替わりに熱いお茶を入れたマグボトルを取り出しておく。

フライパンから肉野菜炒めを直接箸でつまみながら、ガツガツとご飯をかき込む。

「んまあーい!!」

初めて食べた魔物の肉や異世界の山菜、キノコ類に舌鼓

を打ちながら、陽一はさらに2合のご飯をおかわりした。

「ふう、食った食った……」

爪楊枝で菌間をほじりながら、陽一は満足げにつぶや咬いた。

使った食器類は【無限収納+】に収めたあと、メンテナ
ンス機能を使えば綺麗になるのでわざわざ洗う必要もない。

(いやー、まさに異世界サバイバルって感じだな!!)

サバイバルというよりはただの野外自炊とでもいうべき
行動なのだが、本人がこれで満足しているのであれば問題
あるまい。

さらに半日ほど歩いたところで、日が暮れたので寝るこ
とにした。

陽一は何種類かのテントを用意していたのだが、森の中
ということもあり、木々のあいだにロープを張ってハンモ
ックのように空中に固定するタイプの、ツリーテントを使
うことにした。

野外にテントを張った経験のない陽一だったが、意外と
簡単に設置することができた。

「さて、シャワーはともかく、手足や顔くらいは洗ってお
きたいよな」

と言いながら、陽一はホースつきのタンクを取り出した。

ホースの先にはシャワーヘッドがついている。

これは手動蓄圧式の携帯シャワーで、タンクについてい
るレバーを上下に動かすことでタンク内の空気圧を高め、
その高めた空気圧を使ってタンク内の水を出すというもの
である。

ちなみに現在は40度のお湯を溜めてある。

「えいさっ、えいさっ」

謎のかけ声とともにレバーを動かしていると、レバーを
押し込むときの手にかかる抵抗が少しずつ強くなってくる
のを感じる。

感覚としては自転車のタイヤに空気を入れるのに近いだ
ろうか。

「よし、こんなもんかな」

ある程度圧力が高まったことを感じた陽一は、シャワー
ノズルを手に取り、トリガーを引いた。

「うわっと……!!」

思った以上の勢いでお湯が噴き出した。

「おぉー、便利便利」

勢いよく噴出される温かいお湯で手や足を洗い流してい
く。

しばらくお湯を出し続けていると勢いは弱まるが、そのときはまたレバーを上下に動かして圧力を高めればいいだけだ。

泡で出る洗顏料を使つて、顔と手足を洗う。

ちなみに、顔に使えるものなら全身に使えるだろう、ということ、ボディソープやハンドソープは持つていない。幾分かすつきりしたところで、陽一はテントに入った。

無論、土足禁止である。

テントに入ったあと、装備を外して服を脱ぎ、下着類を着替えた。

服や下着も【無限収納十】のメンテナンス機能を使えば綺麗になるので洗濯などは不要だ。

脱いだ下着は収納したまま、プロテクター以外の服を着直す。

さすがに魔物がはびこる異世界の森の中で、寝間着姿になるほど無防備にはなれない。

半径100メートル以内に害意を持った魔物や人が近づいてきた場合、警告を発するように【鑑定十】を設定し、陽一は寝袋に入る。

そろそろ、鑑定〆という言葉の意味を一度辞書で調べ直

すべきではなからうかというほどにスキルは成長していたが、いまさら気にしても仕方がないので、便利過ぎて困ることはあるまいと開き直る陽一だった。

特に何ものにも邪魔をされずに朝を迎えた陽一は、コンビニのサンドイッチとコーヒード朝食を済ませる。

コーヒード保温機能のある大きめのサーバーに作り置きしたものを、カップに注いで飲めるようにしてあった。

ゴミはまとめて収納しておき、ゴミの日にも出すつもりだ。

異世界とはいえ森を汚すつもりはない。

来たときよりも綺麗に〆という、日本人として当たり前
の良識を、陽一はしっかりと持ち合わせていたのだった。

テントを解体して収納した陽一は、再び町を目指して森を歩く。

順調にいけば明日には森を抜けられるはずだ。

そうやって昼過ぎくらいまで歩き、そろそろ昼食にしようかというときに、【鑑定十】が人の存在を告げてきた。

現地人とコンタクトが取れる機会があればと、昼も半径100メートル以内に人がいた場合は知らせるように設定しており、それに反応があつたようだ。

ルートから少し外れるが、陽一は警戒しながらそちらへ向かうことにした。

物音を立てないよう、木陰に身を隠しながら慎重に歩く。やがて、4つの人影を確認できた。

それ以外にも倒れている人はいたが、【鑑定十】の検索に反応しない。

試しに倒れているひとりを【鑑定】してみたところ『状態…死亡』が確認された。

(うへえ、死体かよ……)

無造作に何体も転がっている死体に気味の悪さをおぼえつつ、陽一は生きている4人に注意を向けた。

金属製の軽鎧を着た男が立っており、少し離れてロープを着た男が座っている。

革製と思われる鎧を着ている男が膝をつき、彼の前には肩周りに装甲を着けた女性が仰向けに倒れていた。

(あれ、なんかヤバくね?)

どう見ても女性が犯されそうなシチュエーションである。

死体が転がっている中で男が女性を犯そうとしており、ふたりの男性がそれを傍観している。

どういふ事情があるにせよ、ここは助けるべきではない

だろうか。

(いや、例えば死体は男たちの仲間で、女性が殺人鬼的なアレで、ようやくと拘束できたので意趣返しに……的な)と、まずありえなさそうな状況を思い浮かべつつも、【鑑定十】で男たちの生い立ちからここ数分の行動と思考を確認。

その結果、よくわからない固有名詞がちらほら出てきたが、女性に非はなく男どもがクズだとわかったので、手遅れになる前に助けることにした。

さて、どうやって助けに入るか。

幸い、まだ向こうは陽一に気づいていない。

であれば気づかれる前に不意打ちで殺してしまうというのがいちばん安全だろう。

……が、魔物は殺せても人を殺せるかどうかの自信がない。

(よし、話せばわかるの精神でいこう。ヤバければ【帰還十】で逃げればいいだけだし)

とりあえず丸腰のまま敵意のないそぶりで声をかけることにした陽一は、4人に向かって歩き始めた。

「あの一、すいませーん」



陽一の声に3人の男が驚いたように振り向いた。

ローブの男は慌てて立ち上がり、軽鎧の男は咄嗟とどろきに剣を構える。

そして革鎧の男は腰に下げたナイフを陽一に向かって投げた。

ガイインと、少々間拔けな音とともに、ナイフは透明な盾に弾かれた。

革鎧の男が陽一に気づいた瞬間、攻撃の意思を【鑑定十】で確認できたので、ポリカーボネート製の円盾を【無限収納十】から取り出したのだ。

装備したままの状態で【無限収納十】に収めておくと、取り出したときに即時装備しやすいうことがわかっており、盾を含む防具の手早い着脱の練習を積んでいた。

「ふいー、あぶねえ……」

「ほう、【収納】持ちか」

軽鎧の男が剣を構えたまま感心したように呟く。

「そうか、そりゃ便利そうだな。おい、魔道具なら置いて

いけ。スキルならそこでじっとしている」

おそらく後半は陽一に向けたであろう言葉を革鎧の男が投げかけると、ローブの男が口を挟む。

「魔道具特有の魔力の流れはなかったですね。たぶんスキルのほうでしょう」

「そうか、じゃあ荷運びポーターとして使ってやるからそこでじっとしてな」

自分のことを話しているのであろうことを理解しながらも、陽一は少し冷めたような視線を革鎧の男に向けていた。

「おい、聞いているか」

陽一はその言葉を無視して軽鎧の男へ視線を向けた。

「そんなことより俺の話聞いてくれませんかね、デリック・メルナーさん？」

その言葉に、軽鎧の男がビクン、と反応する。

「貴様……何者だ……？」

「むしろそれはこちらのセリフですよ」

「なに？」

「いえ、あなた方が何者かは知っていますがね、こんなところでなにをしているのかを聞きたいわけですよ。例えば魔術士の名門であるミード子爵家の長男フレールさん

が、こんな森の奥で無抵抗な女性を囲んでなにをしているのかと」

今度はローブの男が驚いたように顔を上げた。

「コルボーン伯爵の依頼をベラジール子爵家の執事を通じてそのゲンベルとかいう小悪党が受けたのまでは理解できるのですが、王都騎士団入り間違いなしのデリック・メルナー次期男爵と、宮廷魔導師として将来が約束されているファレル・ミード次期子爵がなぜこんなことをしておられるのでしょうかねえ？」

ファレルと呼ばれたローブの男とデリックと呼ばれた軽鎧の男の顔が青くなる。

「おい、なにごちゃごちゃしゃべらせてんだ？ さつさと始末しろよ。こっちはこつちでやらせてもらうからよ」

陽一 の存在を不審に思った革鎧の男ゲンベルは、状況がある程度明らかになるまで自重していたが、媚薬の効果で我慢できなくなったのか腰を押し進めようとした。

「いいんですか、あれ？ ヤっちゃったらもう取り返しはつきませんよ？」

その言葉に、デリックが慌ててゲンベルの肩をつかむ。

「な、てめなにしゃが——」

そしてゲンベルの抗議を無視し、デリックは力任せに男を引き倒して胸を踏みつけた。

「ぐえ……。バ、バカヤロウ！ んな奴はさつさと始末すりゃいいじゃねえか！ バレなきやいいんだろがバレなきやよお」

ファレルとデリックが目配せし、頷く。

デリックは念のためゲンベルを軽く踏みつけたまま剣を構えて陽一を警戒し、ファレルが魔術を使うべく手をかざした。

「えーっと、そんな色狂いの男の言葉を聞いちゃっていいんですか？ そいつはただヤリたいだけですよ」

陽一 はゲンベルが催淫状態にあることを確認していたため、説得の対象をファレルとデリックに絞っていたのだった。

「俺ひとりだけでこれだけのことを調べられると思います？ 俺がしばらく経って帰らなければ……。計画は実行されたと判断されるでしょうねえ」

ファレルとデリックが怯む。

「あ、そうそうデリックさんのところのミアアちゃんは、確か今年で10歳でしたっけ？ 父親が女性に対して集団で

乱暴を働くような男だと知れ渡ったら、来年から通い始める幼年学校はさぞ居心地が悪くなるでしょうねえ。いや、もしかすると具体的な嫌がらせがあるかもしれませんよ？
そちらの女性がされそうになつたような」

「なっ……!!？」

「ファレルさんも大丈夫ですか？ 婚約者であるオルタンスさんの父君であるオズルード伯爵は高潔な方だと聞き及んでおりますが、四女とはいえ相手は伯爵家の娘。嫁がせるにふさわしくないと判断され、婚約破棄などされようものなら、この先ミード子爵家はどうなるんでしょうねえ？
あ、優秀な弟君がいらっしゃるから大丈夫か！」

「ぐっ……」

【鑑定士】を使って相手の素性や生い立ちを調べあげ、交渉材料をそろえた上で真摯に説得する。

これこそが、陽一の考えた、話せばわかる、作戦である。
「そちらの女性は俺が保護しますよ。おふたりはゲンベルとかいう小悪党の凶行をすんでのところで止めていただいたわけですし、あとはその男を捕縛して連行してください。それでこの件は解決じゃないでしょうか？」

「そ、そうだね……」

「うむ。危ないところだったな」

どうやらデリックとファレルは陽一の説得に応じてくれるようだ。

「てめえらっ！ ふざけんじやねえぞっ!! その足をどけろお！ 早く……早く姫騎士にぶち込ませろおっ!!」

イチモツをギンギンにおっ立て、先端から白濁した液体を漏らしながら、ゲンベルはただヤラせろと喚き散らした。いままさに仲間が自分を売って助かろうとしていることなど気にもとめていないようである。

どうやら媚薬が効きすぎているようであり、その様子を見たファレルとデリックは逆に冷静になることができたようだ。

ジタバタと暴れるゲンベルのもとにファレルがしがみ込み、腰に差していた短い木の枝のような杖で頭を小突いた。

すると、ゲンベルは嘘のようにおとなしくなり、そのまま気を失った。

どうやら魔術を使って昏倒させたようだ。

ただ、股間のモノだけは相変わらずいきり立っており、ゲンベルがピクンと痙攣するたびに精液がわずかずつだが

漏れ続けていた。

「で、では我々はこれにて……」

「あの、み、みなさんによろしく」

青い顔のまま媚びるような表情で陽一に頭を下げると、ファレルとデリックは気絶したベンゲルをマントで簀巻きにして担ぎ、文字通り逃げるように去っていった。

「ふう……。なんとか切り抜けられたか……」

陽一は大きく息を吐いたあと、思い出したように姫騎士と呼ばれていた女性のほうを向いた。

男たちのことは細かく調べた陽一だったが、被害者と思われるこの姫騎士については一切調べていない。

男たちを調べるに当たっても、彼女の個人情報なるべく伏せるよう、設定していたのだった。

(こ、これは……)

姫騎士を見た陽一は、思わず息を呑む。

胸をほだけ、秘部を露出された格好に、陽一は自分の息子が大いに反応するのを感じた。

(も、申し訳ねえ……!! しかしなんちゅうエロい格好だ……)

白く大きな胸の先端にある乳首は勃起し、露出された秘

部からは愛液があふれていた。

そして銀色の綺麗な髪をもつその女性の容姿は、いままで見たこともないくらい美しかった。

その女性は荒い呼吸で虚ろな瞳で陽一を見ていた。

2 姫騎士を保護

女性、すなわち姫騎士の息遣いは荒く目は虚ろだったが、それでも表情は緊張しているようだった。

(や、やばい……。なんだよこの胸、なんだよこの腰、なんだよこの……)

陽一は申し訳ないと思いつつも、女性の肢体から目を離せなかった。

肩と首周りは装甲に覆われているものの、胸甲は外されて脇に置かれ、その下に着ていたであろうワンピースは開かれていた。

ワンピースの下に着ていた黒いインナーは無残に切り裂かれ、そのせいで本来隠れているはずの乳房が露わになっているのだが、驚くべきはその大きさであろう。

(F……。いやG……。待てよ、仰向けでこの膨らみは……もしかするとH超えの逸材か!?)

仰向けであるにもかかわらずその膨らみは大きく、そして素晴らしい形を保っていた。

少し外に向いた乳首はピンク色で、ひと目で勃起してい

ることがわかる。

(たしか、あのゲンベルって奴が媚薬を塗ったんだっただか)

姫騎士本人は【鑑定】していないが、ほかの男の行動から彼女の状態をある程度推察するのは可能だ。

強力な媚薬を塗られた彼女はいま、強い催淫状態にある可能性が高い。

姫騎士の目は虚ろで、顔は上気し、荒い呼吸のせいで胸が大きく上下している。

そのわずかな動きによって、呼吸のたびに柔らかそうな乳房が形を変えながら揺れる。

(下のほうもたいへんなことになってるなあ……)

黒いショーツの腰紐が切られ、秘部が露わになっている。柔らかそうな銀色の恥毛は、膣からあふれ出した愛液が絡んでいくつかの束ができ、木漏れ日を反射してらてらと輝いていた。

その下から覗く割れ目はぱっくりと開き、愛液に濡れたピンク色の粘膜がヒクヒクと動くのがはつきりと見えた。

ほんのわずかではあるが、なにかを求めるように開かれている膣口は、男なら誰しも吸い寄せられそうな魅惑の穴だった。

(いかんいかん……!!)

陽一は煩惱ぼんごうを振り払うように頭を振った。

おそろくあと1秒でも彼女の乳房なり秘部なりを見てしまつては誘惑に勝てないだろうと判断した陽一は、【無限収納+】からバスタオルを取り出して姫騎士の胸や秘部が隠れるようにかけてやつた。

「ひいうっ……!!」

タオルが乳首をこすり、姫騎士は思わず喘ぎ声を漏らしてしまった。

「あの、大丈夫ですか？」

相手の思わぬ反応に、陽一は心配になつて声をかける。

姫騎士のほうは陽一の行動から敵意はないことを悟つたのか、若干表情が緩んだ。

「ん……はあ……はあ……すまない……んぐうっ……!!」

姫騎士はなんとか答えることができたが、それが精一杯だった。

(いや、全然大丈夫じゃないね、これ)

一応男たちの行動を確認していたので、あらかたの事情は察している。

しかし一刻も早く対処する必要があると思ひ、申し訳な

いと思いつつも眼の前にいる女性の状態のみを【鑑定】した。

状態…全身拘束／四肢麻痺／魔封／催淫／避妊

現在姫騎士は『全身拘束』により身体の自由を奪われ、さらに念入りにかけられた『四肢麻痺』によって手足の感覚を奪われ、『魔封』により魔法を封じられている。

(たしか、スクロールとかいったっけ？ ゲームでもよくある魔導書みたいなもんかな)

実物を見たわけではないが、男たちがスクロールなるものを使ったことは【鑑定+】によって確認しており、そのスクロールが状態異常を引き起こしたことに間違いはないようである。

(えっと、対処方法は？)

『全身拘束』

時間経過、高位魔術士による『解呪』により解除可能。

(ふむふむ。『解呪』つてのは無理だから、待つしかないか。えっと、約20時間で解除されるんだな)

このあたりの情報も【鑑定+】を駆使すれば確認が可能

である。

時間経過による解除までの残り時間は、彼女の状態や能力を加味した上で算出されたものだ。

『四肢麻痺』

時間経過、高位魔術士による『解呪』により解除可能。

(こつちも同じかー。でもこつちはあと40〜60時間もかかるんだな。えーっと40時間くらいから徐々に感覚が戻り始めて60時間ぐらいで全快ね)

『魔封』も同じ結果であり、解除までの残り時間は20時間程度だった。

『催淫』

インキュバスの媚薬を腔粘膜から吸収したことにより発症。時間経過による媚薬の分解および体外排出、もしくは

『解毒』によって回復可能。

(インキュバスとはまたベタな……)

『インキュバスの媚薬』

インキュバスの精液を主成分に、錬金術で錬成し、作成された媚薬。女性に対してのみ強力な催淫効果がある。

(あと、『避妊』……か)

これはどうやら今回の件とは関係ないらしい。

女性でありながら鎧に身を包んでこのような場所にいるのだから、いろいろあるのだろう。

「なあ……君……」

姫騎士が息を荒らげながらも陽一に声をかける。

「なんでしょ？」

「すまないが……私を、助けてはくれないだろうか？」

「まあ、ここで見捨てるほど鬼畜じゃないんでご安心を」

「そう、か……。礼は、先払いで、いいか？」

「礼？」

「ああ……私を、この場で、好きにしてい……」

「はあ？」

絶世の、といっても過言ではない美人に、好きにしていと言われて危うく理性が飛びそうになる陽一だったが、なんとか踏みとどまった。

「いやいや、とにかくいまは回復するまで待たないと」

「だめだ!! もう……我慢、できない……」

先ほどはまだキリッとした戦士のような表情だったが、助かったことがわかって緊張がほどけたのだろう。

彼女が陽一に向ける目は、男を求める女のそれだった。

「私では……不満かもしれないが……、頼む……」

「不満だなんてとんでもない!!」

常時であれば喜んで飛びかかるところだが、いまは非常時だ。

こういう状態で行為に及ぶと、必ずあとで後悔するに決まっている。

助けたお礼を身体で払うと言われて、無条件に突っぱねるつもりはないが、それでも支払いはあと払いのほうがいいに決まっている。

「お願いだ……、もう、おかしくなりそうなんだ……」

姫騎士の呼吸はさらに荒くなり、目は潤み、口からはよだれが垂れていた。

(うーん、とりあえず媚薬を洗い流そう)

陽一は【無限収納十】から携帯シャワーを取り出した。レバーを使って空気を高めると、バスタオルをめくって秘部を露わにし、そこをめがけてレバーを引いた。

「んあああああ!!」

シャワーの刺激を受けた姫騎士は、大きな喘ぎ声を上げながら、腰をのけざらせた。

「あああつ、だめっ、イクウ!!」

手足をだらんと伸ばしたまま、姫騎士の身体が大きく仰

け反り、痙攣する。

麻痺した手足はまったく動かないが、拘束された体幹は本人の意思では動かせないものの、刺激に対する反応はあろうだ。

陽一は姫騎士の卑猥な姿に飛びそうになる理性を抑えつつ、泡の洗顔料を取り出して手に取り、割れ目の周りや膈粘膜を洗っていく。

「んぎいっ……!! あつあつあつ、また……、またイッちやううっ……!!」

陽一の手が動くたびに姫騎士は腰をビクビクと震わせた。シャワーとは比べものにならない刺激に、何度も絶頂を迎えているようだ。

陽一は興奮しつつもなんとなく申し訳ない気持ちになる。(くそう……エロいなあ、この娘……)

姫騎士をひどく見るときから硬くなっていたイチモツの先端から我慢汁が出るのを感じながらも、陽一は情欲に流されることなく丁寧に膈内粘膜を洗った。

粘膜を石鹸で洗うというのはあまりよくないらしいが、いまは非常時なので仕方があるまい。

「あつあつ……なにかっ出る! 出ちやうう……」

何度目かの絶頂を迎えた姫騎士の股間から、透明な液体が勢いよく噴出された。

姫騎士の身体がビクンビクンと震えるたびに、その液体はプシャッと飛び、秘部を洗い流すシャワーの水流を越えて撒き散らされた。

その一部が、陽一の顔にかかる。

(まさか……、潮?)

顔にかかった液体を指でとつてみると、それはさらさらとした水のようにであり、しかしほんのわずかに粘度を感じられなくもない、といったものだった。

そして潮吹きが一段落すると、姫騎士はほんの少しだけ落ち着いたように見えた。

(そうか、体外排出)

潮であれ汗であれ、体外に媚薬を出してしまえば少しは楽になるようなので、陽一はスポーツドリンクを取り出して姫騎士に飲ませることにした。

たび重なる絶頂に疲れたのか、ぐったりと仰向けに倒れている姫騎士の頭を抱え起こし、スポーツドリンクの飲み口を彼女の口に当てた。

「さ、飲んで」

虚ろに目をうつすら開いた姫騎士はなんとか意識を保っているようで、陽一はペットボトルのスポーツドリンクを流し込んでやる。

口に含んだ瞬間、姫騎士は目を見開き、驚いたようだが、すぐにゴクゴクと飲み始めた。

もしかすると初めての味だったのかもしれない。

水分を摂取し媚薬の血中濃度が下がれば、もう少しマシンになるはずだと、陽一は素人ながらに考えている。

姫騎士はびつしりと汗をかいており、そのせいでのが渴いていたのか、500ミリリットルボトル2本のスポーツドリンクを一気に飲み干した。

陽一がスポーツドリンクを飲ませているあいだも、姫騎士は何度もビクビクと腰を震わせていた。

「さて、どうすつか……」

できれば彼女を安全な場所で休ませてあげたい。

しかし、森の中でテントを張っても、魔物の脅威がある警戒に関しては陽一でもなんとかできそうだが、そうすると看病が疎かになりそうだ。

「あ!!」

名案を思いついたとばかりに声を上げた陽一は、近くに

転がっていた姫騎士のものであろう鎧を【無限収納十】に収めたあと、彼女をお姫様抱っこの要領で抱え上げた。

ホームポイント4に現在地を登録した陽一は、姫騎士を抱え上げたまま【帰還十】を発動した。

「おっし!!」

陽一は腕に姫騎士を抱えた状態で、自宅マンションへと【帰還】することに成功したのだった。

姫騎士を抱えた陽一は靴のまま部屋へと上がり、寝室のベッドに姫騎士を横たえた。

「ここは……?」

まだ息遣いの荒い姫騎士だったが、多少思考力は戻っているようだった。

「俺んち。あんま気にしないで」

姫騎士は少し戸惑ったような表情を見せたが、考えるのをやめたようだ。

「とりあえず、鎧脱がすよ?」

姫騎士が無言で頷くのを確認した陽一は、まず肩の装甲を外そうとしたのだが、外し方がわからなかった。

(このまま収納できねえかな?)

そう思っただけだと、肩の装甲が【無限収納十】に収ま

った。

「お、便利」

思わずそう口にしたが、残りの装甲も収納していく。

検証の結果、他者の装備品に関しては10メートルという効果範囲であっても直接触れなければ収納できないことがわかった。

逆にいえば触れさえすれば武器だろうが防具だろうが、それこそ下着であっても自由に収納できるということだ。

切り裂かれていたインナーやワンピースもそのまま収納し、姫騎士は全裸になった。

(もはやイリュージョンだな)

自分のスキルの異常な効果に呆れつつ、陽一は【無限収納十】から大量のバスタオルを取り出した。

先ほどまでの格好もかなり卑猥だったが、全裸になったらなつたで見事なプロポーションが明らかとなり、陽一は再び情欲と戦う羽目になった。

陽一は姫騎士の腰を抱え上げ、尻の下にバスタオルを数枚敷く。

汗で湿った熱い柔肌の感触が手に伝わってきた。

股の下あたりまでをカバーするように何枚もバスタオルを重



ねて敷き、その上に抱え上げていた腰を下ろした。

「あの……、出したくなったら、我慢しなくていいからね」
「なっ……」

なになをとは言わなかったが、なんとなく陽一の言いたいことを察した姫騎士はその言葉に驚き、抗議の目を向ける。

どうやらスポーツドリンクを大量に飲み、大量に汗をかいたのが功を奏したのか、多少まともな判断力が戻ったらしい。

「いや、出すもん出したほうが早く媚薬の効果が切れるから」

「むう……」

姫騎士は不承不承といった表情で視線を逸らした。

力なく横たわる姫騎士の肌には、玉のような汗が浮かび上がっている。

（こりゃ汗も拭いといたほうがいいかな）

陽一は【無限収納+】から新しいバスタオルを出す、姫騎士の身体を拭いていった。

姫騎士はなにか言いたそうな表情だったが、特に文句を言うでもなくされるがままになっていた。

（ああ、こうやってたら実里ちゃんのこと思い出してきた）

初めて実里と出会った夜、インフルエンザでダウンした実里にスポーツドリンクを飲ませ、身体を拭いてやったのを思い出す。

それで、陽一は少しだけ落ち着くことができた。

（にしても無茶苦茶いい身体してんなあ……）

豪壮な鎧を着ていたわりには華奢な身体で、バランスよく筋肉はついているもののほどよく脂肪もまとっており、女性特有の柔らかさは失われていなかった。

一見華奢に見える体型だが、胸はかなり大きく、思わずしゃぶりつきそうになるのを我慢しながら、谷間や下乳を拭いていく。

「んああっ!!」

タオルが乳首に触れると、姫騎士の身体がピクンと震えた。

その様子に情欲をかき立てられながらも、陽一はそれに耐えつつ汗を拭いていく。

実里のことを思い出したことでほんの少しだけ落ち着いていたのだが、姫騎士の魅力的な肢体や彼女の淫猥な反応によって、陽一の理性は再び失われつつある。股間はすで

に痛いほどいきり勃っていた。

尻の下に敷いたタオルが、大量に分泌された愛液によってベトベトと濡れている。

「ひうっ……!! んっんっ、ああっ……!!」

流れ出る愛液をなんとかしようとタオルで秘部を拭くと、姫騎士は大きく喘ぐ。拭いたそばからとめどなく愛液があふれてくる。

(まあ、これも体外排出か?)

姫騎士の股間を拭くという行為と、それに反応する彼女の様子に理性の限界を感じた陽一は、再び全身に浮かび上がった汗を無視してタオルケットと少し厚手の布団をかぶせた。

「暑いかもしれないけど、汗いっぱいいたほうが早く治まるから……たぶん」

姫騎士は陽一の言葉に無言で頷いた。

「ここは安全だから、気にせず休むといいよ」

「……ありがとう、すまない」

布団をかぶせ姫騎士の肢体を隠したことでギリギリのところまで踏みとどまった陽一は、姫騎士に再びスポーツドリンクを飲ませた。

汗を始めとする体液を大量に分泌したせいでのどが渇いていたのだろう。

姫騎士は500ミリリットルのスポーツドリンクを2本、一気に飲み干した。

「ふう……。ほんとうに……。ありが……。とう……」

姫騎士はわずかに微笑んだあと、力尽きるように意識を失い、すやすやと寝息を立て始めた。

その笑顔とそれに続く穏やかな寝顔に、陽一はドクンと鼓動が跳ねるのを感じた。

それが胸のときめきだけで終わっていればよかったのだが、高鳴る鼓動が送り出す血液は股間に集中してしまい、硬くなっていた陰茎がさらに充血するのを陽一は感じてしまった。

(お礼は、先払いって、言ってたよな……)

礼は先払いで、彼女の身体を好きにしているという姫騎士の言葉を思い出す。

姫騎士は見れば見るほど美人だった。

そして布団の下に隠れている見事な肢体を思い出す。

(こないない女が、してもいいと言ってくれているのに、それを無視するのは馬鹿なんじゃないだろうか?)

「んあっ!! んう……すう……すう……」

知らず、陽一の手が乳房に伸びていた。

わずかに触れただけで姫騎士はビクンと身体を仰け反らせ、短く喘いだだが、すぐに寝息を立て始めた。

続けて陽一は足元から布団をめくり、股間を露わにした。

(これだけ濡れてれば……)

薄い銀色の恥毛の陰に隠れた真つ白な割れ目。

その割れ目がぱっくりと開いた奥にある白に近い薄桃色の肉髯と、その奥でひくひくと動くピンク色の粘膜。

さらに奥でわずかに開きなにかを求めるようにゆっくりとうごめく膣口、すでに包皮の束縛を逃れてぷっくりと膨れ上がった陰核。

それらすべてがとめどなくあふれ出す愛液に濡れており、まるで陽一を誘っているようだった。

これだけ濡れていればなんの抵抗もなく自分を受け入れるのではないか？

姫騎士が処女であることをまだ知らない陽一は、そんなことを考えていた。

(ていうか、あと何回も身体を拭いたりしなくちゃいけないしな……。1回くらい抜いとかないと……)

すでにタオルケットはかなりの汗を吸っており、尻の下に敷いたバスタオルも、垂れ流される愛液を受け止めきれず、水たまりのようなものができている。

この調子でいけば、あと何回かは身体を拭いたり、タオル類を交換したりする必要がある。そのたびに露わになる姫騎士の肢体や股間を前にして、陽一は理性を抑える自信がなかった。

自分の股間に目をやると、振り返った肉棒の先端から出た液体のせいで、ズボンに染みができている。

(もう、限界……。申し訳ないけど1回だけ……!!)

陽一は姫騎士の股間に向けてゆっくりと手を伸ばした。

——ピンポン。

指先が秘部に触れるかどうかというところで、ドアチャイムが鳴った。



はつと我に戻った陽一は、めくっていた布団をかけ直し、

慌てて寝室を出た。

そして、ドアフォンと連携させているスマートフォンのアプリを起動させる。

「花梨……!？」

スマートフォンのモニターにはマンシヨンのエントランスにいる花梨の顔が映し出されていた。

「……はい」

アプリ上で『応答』をタップしたあと、陽一はできるだけ落ち着いた声で答えた。

「あ、陽一？ あたし、花梨だけど」

「うん。どうした？」

「えっと……、前に住所教えてくれたからさ、来たんだけど……、まさかった？」

陽一の声色からなにかを察したのか、花梨は少し申し訳なさそうに答えた。

「あー、いや……」

寝室の扉を見ながら、陽一は思案していた。

たしかに、あまりいいタイミングとはいえない。

「あの、都合が悪いなら出直すよ……?」

（いまは出直してもらったほうがいいか?）

しかし、ここで花梨に帰ってもらったら、このあと自分
はなにをするのだろうか。

先ほどは花梨が鳴らしてくれたドアチャイムのおかげで
我に返り、一線を越えずに済んだわけだが、次はどうなる
だろうか。

「……なんか、タイミング悪かったみたいね。次は事前に
連絡入れるわ」

「待つて!!」

思わず呼び止めてしまったが、なにか考えがあつてのこ
とではない。

しかし、呼び止めてしまった以上、やはり帰ってくれな
どと言えるはずもなく――、

「と、とりあえず……上がって」

「いいの……?」

「……うん」

結局陽一は花梨を通してしまふのだった。

マンシヨン入り口のオートロックを解除したあと、陽一
は自分の股間が我慢汁で濡れていることを思い出し、花梨
が部屋に到着するまでにパンツとズボンを穿き替えておい
た。

さらに、玄関から寢室まで姫騎士が垂らした愛液が床を濡らしていたので、それも拭いておく。

——ピンポン。

今度は部屋のドアチャイムが鳴り、陽一は花梨を迎え入れた。

「いらっしやい」

「うん……。急にごめんね？」

玄関に立つ花梨は、申し訳なさそうに肩尻を下げて陽一を見上げていた。

「いや、いいタイミングで来てくれたよ、ホント」

「いいタイミング……？」

「ああ、いや、なんでもない。じゃ、あがつて」

「うん、おじゃまします」

部屋に上がった花梨が一瞬眉をひそめたのだが、陽一はそれに気づかなかった。

「お茶でいい？ コーヒー淹れようか？」

「ううん、お茶でいいよ」

陽一は冷蔵庫から500ミリリットルのペットボトルのお茶を2本取り出すと、リビングのソファに座ってもらっていた花梨の隣に腰かけた。

「ありがと。にしても、すっごい綺麗な部屋ねえ。家賃とか大丈夫？」

「開口一番家賃の心配かよ」

「そりゃ心配もするでしょうよ。ずつとあの部屋に住んだ男がこんないい部屋に引越してんだもん」

「まあ、仕事がうまくいってね。当面は問題なさそうだから思い切つてさ」

「そっか」

取り留めない会話をしているふたりだったが、双方とも落ち着きがない。

花梨はやたらと室内をキョロキョロと見回し、たまに陽一と視線が交錯すると慌てて顔を逸らす、というのを何度か繰り返していた。

陽一は寢室にいる姫騎士の存在を隠しているので、平静を装よそおいきれいでいるのだろうなという自覚はあったのだが、花梨の落ち着きのなさがどうにも腑に落ちない。

「ねえ、陽一……」

しばらく雑談を続けていたふたりだったが、徐々に口数が減ってきたところで、花梨がふと切り出した。

「お邪魔だったら、あたし帰るよ……？」

そうやって陽一のほうを見る花梨は、心なしか頬が赤く染まっております、普段以上に目が潤んでいるように見えた。

「ど、どうしたんだよ、急に？」

「あの、さ……。陽一は気づいてないかもしれないけど……」

そこで一度言葉を切った花梨は、頬をさらに赤らめ、視線を陽一から外した。

「匂い、すごいよ……？」

「匂い？」

「うん。その……言いくいんだけど、女の人の……エッチな匂い、っていうのかな……」

少しうつむき加減になった花梨が、申し訳なさそうに上目遣いでそう告げてきた。

「あー……」

言われてみれば、姫騎士はかなり汗をかいていたうえに、愛液も垂れ流しの状態だったことを思い出す。

女性のほうがこういった香りには敏感だということもあり、花梨は部屋に入った瞬間から室内に充満する匂いの存在に気づいていたようだった。

「あの、さ。もしかして、いるの……？」

花梨が寝室のドアのほうを見てそう言ったので、陽一は観念することにした。

「……うん」

その返事を受けた花梨は、慌てて立ち上がった。

「じゃ、じゃあ！ あたし、帰るね!!」

うつすらと目尻に涙をたたえた花梨の手を、陽一は咄嗟につかんだ。

「待ってくれ」

「ちょ……、べつに、責めてるわけじゃないからっ!! あたしのことなんかほっといてさ、その——」

「だから待ってっ!!」

「ひっ……」

思わず怒鳴ってしまった陽一の声に、花梨は怯えたように身を縮めた。

「ごめん……、大きな声出して」

「……ううん」

少しこわばっていた花梨の身体から力が抜けるのを感じた陽一は、彼女の手首を離した。

「ちょっと、わけありでさ……。もし嫌じゃなければ、花梨には力を貸してほしい」

このまま花梨を帰してしまつてはいろいろとまずいことに陽一は気づいた。

まず第一に、花梨に誤解されてしまうこと。

べつに恋人同士ではなく、どちらかといえど都合のいい身体だけの関係が続けているふたりだったが、身勝手な理屈であると理解しながらも、へんに誤解されるのは避けたかった。

第二に、ここで花梨を帰してしまつては、また姫騎士とふたりきりになつてしまうということ。

先ほどは花梨がタイミンクよく訪ねてきてくれたおかげで一線を越えずに済んだが、次はもう無理だろう。

一線を越えたところで姫騎士は文句を言うまいが、陽一のほうはそれなりに罪悪感を抱くことになりそうなので、できれば避けたかった。

となれば、ここはもう花梨に頼るのがいちばんいいのではないかと、様々な要因で少なからず冷静さを欠いた陽一はそう考えてしまった。

「とりあえず、見てもらったほうが早いか……。来て」

陽一は諦めたように、あるいは少し安堵したように息を吐いたあと、花梨を連れて寝室に入った。

「むう……、なに、これ……?」

寝室の扉を開けた瞬間、充滿していた匂いに襲われた花梨が表情を険しくした。

なるほど、ここまで匂いが充滿してしまえば、陽一にも花梨の言わんとしていることがなんとなく理解できた。

「この娘^なだけけど……」

「……きれい」

眉をひそめていた花梨が、姫騎士の姿を見るなり表情を緩め、そう呟いた。

ベッドの上で眠る姫騎士は、女性であつても見惚^{みと}れてしまふほど美しかった。

「で、この娘^などうしたの?」

そこで陽一は、彼女が悪漢に襲われていたところを助けたこと、ドラッグ——媚薬のことはそう説明した——の影響でまともな状態ではないということ、どうやらわけありのよう^{よう}で警察には頼れないことを説明した。

「はあ……。なんでアンタがそんな厄介事を……」

かなり穴のある説明だったが、花梨は特に陽一を追及するようなことはなかった。

というか、花梨であればある程度無理のある状況であつ

でも、見過ごしてくれるだろうという打算が陽一にはあったのだった。

「そう。じゃああたしはこの娘の世話をすればいいわけ？」

「……いいのか？」

「いいも悪いも、ほっといたらアンタこの娘のこと襲っちゃうでしょうが!!」

「……………はい」

どうやらお見通しのようなのである。

「つたく……。で、なにすればいいの？」

「えつと、とりあえずドラッグを抜く必要があるから、汗とかいろいろ出してもらって、それを拭いてあげる感じかな」

「わかった」

陽一は大量のバスタオルとスポーツドリンクを用意し、花梨に託した。

「じゃ、あとはあたしがやつとくから、アンタは出てって」

「お、おう」

姫騎士にかけられた布団をめくった花梨が、甲斐甲斐しくその身体を拭いていく。

大きな胸を開いて谷間を拭いたり、乳房を持ち上げて下乳に溜まった汗を拭き取る。

股間からは相変わらずとめどなく愛液が流れ出ていて、それを花梨が優しく拭き取るたびに、姫騎士の身体がビクンビクンと震える。

そんな寝室の様子を想像し、股間を硬くしながら、陽一は気を紛らわせるようにスマートフォンをいじり、時間を潰していた。

花梨が寝室に残っておよそ20分経ったころ、寝室のドアがガチャリと開いた。

開かれた扉からは淫猥な匂いとともに、花梨がわずかにふらつきながら姿を現わす。

「おう、おつかれ」

「うん……」

花梨の様子がどこかおかしいと感じた陽一は、ソファから立ち上がる。

そして花梨のほうへ歩み寄ると――、

「んむっ……………!!」

陽一に駆け寄った花梨が突然唇を重ねてきたのだった。

「んちゅ……………レロレロお……………ちゅる……………んじゅるう……………」

そして唇が重なるのとほぼ同時に、花梨は陽一の頭に手を回して逃げ道を遮るように抱え、舌を貪り始めた。

姫騎士の世話とへんな想像のせいでかなり興奮していた陽一は、多少戸惑いながらも花梨を受け入れる。

花梨はしばらく陽一の舌を搦め捕り、口内を舐め回した。そうしながら頭を抱えていた片方の手を離し、陽一のウエストに手をかけてジャージとパンツを同時に下ろす。

「んはあ……はあ……はあ……」

しばらく舌を絡め合っていたふたりだったが、花梨のほうから離れ、呼吸を荒くして上気した顔を陽一に向けた。

「はあ……はあ……もう、だめ……」

そう言いながら花梨は陽一に脚を絡め、露わになった肉棒をシヨーツ越しの股間にピツタリとくつつけた。

陽一は肉棒の先端に、じつとりと濡れた布を感じた。

「もう、挿れるね……?」

花梨はシヨーツを軽く指でずらし、そのままズブズブと腰を下ろしていった。

「んはああああつ!!」

シヨーツがずらされたあとに現われた秘肉も充分に濡れており、花梨の肉壺は陽一の肉棒をなんの抵抗もなく受け

入れた。

ねつとりと絡みつく粘膜に包まれながら、陽一の肉棒は花梨の体内を進んでいき、やがて根本までがずつぽりと啜え込まれた。

「あうんつ!! あつ……あつ……」

肉棒が根本まで入り、先端が最奥部に触れるやいなや膣がキュッと締まり、その直後に花梨の膝がガクンと折れた。

「おい、大丈夫か?」

慌てて身体を抱きかかえた陽一が花梨に呼びかけたが、彼女は半分白目を剥き、半開きの口からヨダレを垂らしながら、ときおり短い喘ぎとともにピクンピクンと腰を震わせるだけだった。

ただ、全身が弛緩しているように見えて膣だけは相変わらずギユウギユウと陽一を締め上げており、たつぷりと濡れた肉壁の表面がウネウネと動いているようで、ただ挿入しているだけだというのに陽一は危うく果てそうになる。

「んはあ……、はあ……ごめん。挿れただけで、イッチャつたあ……」

花梨が気を取り戻すのと同時に、陽一の首に回された彼女の腕に少し力が入り、逆に膣の締めつけは弱まった。

「陽一い……。全然、足りないよお……」

己の中に陽一を包み込んだまま、花梨が懇願する。

「おねがい、陽一の生ち×ぼで、あたしのお×んこじゅぼじゅぼ突いて——んひいつ!!」

花梨が言い終わるが早い、陽一は思いつきり腰を突き上げた。

そして、花梨の尻をつかみながら、何度も何度も激しく突き上げる。

「そんな大きな声出したら、中の娘に聞こえちゃうよ？」
いまふたりは寢室のドアから少し離れたところで交わっており、壁一枚隔てた向こうでは姫騎士が眠っている。

陽一の言葉でそれに思い至ったのか、花梨は口を閉じて身を縮めた。

「んっんっんっ……。んむう……。んふう！んああっ！だめえ！声、出ちゃうよお……!!」

しかし数回のピストン運動で我慢できなくなったのか、花梨は身を仰け反らせ、大きな声で喘ぎ始めた。

「あつあつあつあつ！ぬちゅぬちゅこすれて、気持ちいいよっ……!!」

「ああ、俺も、花梨の腔内、すごく気持ちいい」

「ああんっ！だったら、もつといっぱい、奥までズンズン突き上げてえ!!」

ずちゅずちゅと音を立てながら何度も突き上げているうちに、穿いたままだった花梨のタイトスカートがめくれ上がって股間が露わになった。

肉棒が出し入れされるたびに愛液があふれ出し、ずらされただけのショーツに染み込んでいく。

クロツチに吸収しきれなくなった愛液はやがて花梨の脚を伝い落ちて床を濡らした。

「んっんっ……。だめえ……。また、イッチャウ……。さつきイッたばつかなに、あたしまたイッチャウウっ!!」

「花梨、俺も……」
「いいよ！おねがい、そのまま、お腹の中にいっぱい出してえ」

「ああっ……!!」

「んひいひいひいっ!!」

最後に思いきり奥まで突き上げた陽一の肉棒は、その先端を子宮口に当てた状態でビュルッ!!と勢よく精液を吐き出した。

「んああ……。いっぱい、出てるう……」

ドクン、ドクンと陰茎が脈打ち、二度三度と精液が放出される。

それに合わせるように花梨の膣道はギュツギュツと締まり、そのたびに彼女は短く喘いだ。

膣奥に放出された精液はやがて重力にしたがつて膣道を下り、膣口に達する。接合部からじわりと白濁の粘液がにじみ出てきた。

「あぁん……陽一の、あふれちゃったぁ……」

自身の股間からポタリポタリと落ちる精液を眼下に、花梨は名残惜しそうにそう呟いた。

しばらく立ったまま抱き合っていたふたりだったが、正気を取り戻した花梨が踏んばって背伸びしようとしたので、陽一は腰を落として肉棒を抜いてやった。

「んう……」

肉棒が抜けた瞬間、花梨が短く喘ぐのと同時に、抜けた穴からポトリと精液が落ちた。

「ごめん、床……」

「いいよ。それより、どうしたんだよ、急に」

二度絶頂に達して少し冷静になったのか、花梨は少し恥ずかしげにうつむいた。

「あのね……、あの娘のお世話してたら……、なんていうか、こう……ムラムラきちゃって……。匂いのせいか……?」

「あー、そうかも」

姫騎士が粘膜から吸収した媚薬が、汗や愛液とともに排出され、それが気化した可能性はある。

その媚薬混じりの空気を吸った花梨が催淫状態に入ったとしてもおかしくはない。

まだ陽一の首に腕を絡めたままの花梨が、さらにぐっと抱きついて彼の胸に顔を埋めた。

「どうしよ……、あと何回かお世話したほうがいいんだろうけど……」

そこまで言ったあと、花梨は顔を上げ、潤んだ目を陽一向けた。

「また、エッチな気分になっちゃうよ……」

その言葉と表情に陽一はイチモツがギンツと硬くなるのを感じた。

「きゃっ?! え、陽一……?」

陽一が突然彼女の脚を抱えて持ち上げて駅弁のような姿勢になったため、花梨は戸惑いの声を上げた。

「べつにいいんじゃない？ そのたびにすればいいと思うよ。こうやってさっ……!!」

まだショーツがずれたまま露わになっていた花梨の膣に、陽一は硬くなつた肉棒を思いつき突き挿れた。

「ひぎいいいいいっ!!」

花梨が悲鳴のような喘ぎ声を発するも、陽一は気にせず何度も腰を突き上げた。

「ひうっ！ んっんっんっ……!! いいっ、のっ？ 何回もっ、してっ……」

花梨は陽一に激しく突かれ、よがりながらも、戸惑いがちに問いかける。

「ああっ。花梨とだったら、何回でもしたいからさ。だから、したくなったら遠慮なく言って」

「あんっあんっ！ 嬉しいっ……!! じゃ、いっぱいしょっ!!」

結局そのあと、花梨が姫騎士の世話をして部屋から出るたびに、ふたりは何度も求め合うのだった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>